

## 直会（なおりい）の意義について

直会とは、祭りの終了後に、神前に供えた御饌御酒（みけみき）を神職をはじめ参列者の方々と戴くことをいいます。

古くから、お供えして神々が召し上がった食物を人々が戴くことで、神々の恩顧（みたまのふゆ）を戴くことができると考えられてきました。この共食により神と人が一体となることが、直会の根本的意義であるということができます。

簡略化されたものとして、御酒を戴くことが一般的に儀礼となつていますが、これは御酒が神饌の中でも米から造られる重要な品目であり、また調理をせずにその場で直接戴くことができるため、象徴的にこのようなものとなりました。

神々にお供えした物を下げて戴くということは、宮中においても毎年おこなわれる新嘗祭（にいなめさい）の際に、天皇陛下が親しく新穀を神々に捧げ、また御自らも召し上がるという儀礼に見ることができ、「神人共食」という祭りの根本的意義が示されています。

直会の語源を「なおりあい」とする説があります。神職は祭りに奉仕するにあたり、心身の清浄に努めるなどの斎戒をします。神社本庁の「斎戒に関する規程」には、「斎戒中は、潔斎して身体を清め、衣服を改め、居室を別にし、飲食を慎み、思念、言語、動作を正しくし、穢（けがれ）、不浄に触れてはならない」とあるように、通常の生活とは異なるさまざまな制約があり、祭りの準備から祭典を経て、祭典後の直会をもつてすべての行事が終了し、斎戒を解く「解斎」（げさい）となり、もとの生活に戻ります。「なおりあい」の語源は、「もとに戻る＝直る」の関係を示して直会の役割を述べたものであり、直会が祭典の一部であることを指しています。

直会が神事として一般の宴とは異なるのも、こうした意義をもつておこなわれているからなのです。

